

街かど

募集しています

- ・短歌
- ・俳句
- ・詩
- ・随筆
- ・イラスト
- ・写真
- ・まんが
- ・その他

町への意見や要望も受け付けます
文章は苦手というかたは連絡を取材に行きます
匿名もよいです
投稿・連絡先は黒崎町大野243-1
役場企画開発課
広報「街かど」係
7-3101



今月の投稿



一人より二人(グループ紹介)
▲9月15日(月) 敬老会で演奏する皆さん。場内が静まりかえってしまった
◀教えてくれる人がいないので独学でやったという部長の白川さん

楽しくて健康によくて人に喜んでもらえて最高です

善久老人会音楽倶楽部
聞いてびっくり、見てびっくりの善久老人会音楽倶楽部。お世辞抜きに一流の演奏で、楽団員は平均年齢六十うん歳なんです。部長兼バイオリニストの白川繁雄さん(七三)は、「老人会というと緒立の黒埼荘で湯治するイメージでしょう。それでは何か欠けているように。わたしが善久老人クラブに入ったとき、みんなに呼びかけて作り直しました」と倶楽部発足の理由を話します。現在、部員は二十人。バイオリン、ピアノ、カル、琴、三

味線、そしてコーラスをそろえています。練習は月三回。今まで六十曲近く演奏したとか。年に二、三回は各地の老人ホームを慰問するほどです。外川静さん(六八)、井村カツエさん(六七)、斎藤モトさん(六三)は口をそろえて「楽しい」。滝沢誠伍さん(六三)は「腹から声を出して健康にいいね」。「人に喜んでもらえて最高」と、荻部マツさん(六五)。六十歳前なのに入ってしまったのは白川マツイさん(五五)。音楽は年齢も超えるようです。

詩

酒場

望月 英子
(焼酎団地)

からみつくダミこえに 罵声をかえして
ものうく 罵声をかえして
フロアで一人 身体をゆらす

頭のなかで ジジー ジジーと虫が鳴く
モノクロのデイトリビの顔
速い日の いらくさのにおい

紫煙がゆらぐなか
ブルースを一人踊る



漢詩

庄屋左門(一)

八音の韻

幼名伝 太号 鯉 齊
板井村 生 庄屋 倪
父伝 逝 分水 一 揆
少学 鈴 木 文 台 齋
二 勉学 研 鑽 蘊 八 年
十 有 八 庄 屋 嗣 縁
明 治 十 二 年 県 議
県 政 発 展 鋭 意 専
市 民 嘔 殺 事 件 興
之 訴 領 事 裁 判 徴
醜 金 集 慰 論 遺 族 承
二 七 年 衆 議 員 承

萩野 覚心
(読み)

ようめいをでんたごんさいとうす
いたいむらのしょうやのじとしてうまる
ちちでんいはいほんすいのいっきにゆく
わかくしてすすぎふんだいのへやにまなぶ
べんがくけんきんつむことはちねん
じゅうゆうはちねんしょうやのえんをつぐ
めいじじゅうにねんけんきとなる
けんせいはいつてんにえいをもつばらにす
しみんのおうさつじけんおこるや
これをりようじさいばんにうたえてごし
きよきんをあつめていぞくをいゆし
にじゅうしちねんしゅうぎいんをうける

短歌

黒崎短歌会

たわいなき言葉の中にも八十路の
姪は時々我を導く 小出美喜子
夕立のはげしき増して雷光の光と間
なく地ひびきの立つ 乙川 竹
行き交える参拝の人らをまをにして
河骨の花静かに咲けり 阿部 淨子
前は海三方山なる別天地間瀬の旅
館で全寿祝受く 柏 直樹地
亡き姉の形見の衣を手に取ればほの
かに伝う君の移り香 広瀬 八重
夕暮れて隣の家も我が家も覆い被
ぶす如闇に包まる 宮田 ミイ
憂きことの多きこの世に生まれ来てた
ひたすらに折りつつ生きる渡辺 ウタ

俳句

黒崎俳句の会 (静水選)

宿坊の主の酌受けながら山菜料理
の夕餉樂しむ 泉井 ヨ子
今年こそ米価値上げを願いども又
握置きと今宵きまりぬ 笠原 セツ
助手席の窓に足掛け身を出して赤
き車に犬が乗り行く 堀内 昌江
新盆の夫の御供物送り来ぬ篤き病
の義弟なれど 金内 セツ
子期せざる晩夏の照りに遅れいし稲
立ち直り開花期に入る 平松清治郎
公園の池のほとりを歩み来し少年
二人鳩を威せり 橘 芳園
声高に罵る亭主良しと聞く病の癒
えた証に思えば 小林
車椅子押して老婆いたわりの姿美
し祭りの夕べ 佐藤 キン

俳句

黒崎俳句の会 (静水選)

菩提寺の 無縁の墓の 曼珠沙華
トンネルをぬけし広野の 残暑かな
新盆の 賑わい終る 母残る
猫の声 いや蟬時雨 道走る
百日紅 百日咲かぬに 秋の風
蟬の殻 孫にはこわし 後すざり
蟬しぐれ 思い思いの 大昼寝
主婦の座を ゆずつて気軽 秋衣賣う
齋藤 モト

俳句

秋茄子は 鯨が合うと 母の言う

虫喰いの 多き枝豆 終りかな 倉橋 義雄
新涼や 蛇口の水の あたたかし 田辺 正二
眞夏日や 焼けし鉄路の きしき音 木下 富代
盆僧は 読経すませて 足早に 那須野宗一
宿下駄の 音のひびきや 雲の峯 高橋 睦治
区切られし 病院の窓 秋の雲 早川 ウメ
菊盃に 結って路端の 髪草 浅間 しげ
夕日沿び 稲刈りしたる 亡き母と 佐藤 キン

人の心に花一輪

桂 小 金 治

話

僕は正十四年十月六日に生まれました。オヤジは魚屋で、夫婦の暴力は暴力だが、子供への暴力は暴力ではないと思っていて、よくたたかれました。オフクロは字が読めなくて、僕が本を読んでもあげると、涙を浮かべて、字がよめる子はよい子だと褒めてくれました。オヤジはケチで、ハーモニカを買ってくれと頼んだ

とき、葉っぱを僕によこしました。草笛で鳴らそうとしても鳴りません。毎日、訓練してある日学校の帰り道に鳴ったときはうれしかったですね。そのとき、オヤジから努力の上に辛抱を重ねなくてはならないと知りました。また、いい気になるな、自分一人の力でできたんじゃないかと、半分は人のおかげだと思えと言ってくれました。翌朝、枕元にハーモニカが置いてありました。片手でキリはもめないと

いう言葉がありました。オヤジは、二ヶたになつたら自分で飯を食え、働くとははた(端)が楽になると書くんだ、と家



業を手伝いました。オヤジは勉強しろとは一言も言いませんでした。でも、上の学校へ行かせてくれました。制服は夏冬一着で五年間通っていました。つぎはぎとあだ名されたときオヤジは、つぎはぎをしてくれるお母さんがいると思え、と言ってくれました。

たので、クラブは負担のない弁論部に入りました。これが落語に役に立ったと思っています。戦争時代だったので、オフクロに少年飛行兵になると言ったら、飛行機は落ちるからやめなさいと言われ、戦車兵になろうと思いましたが、子供を死なせたくなかったのです。終戦は富士のすそ野で迎えました。空襲で家が丸焼けになり、オヤジは群馬にオフクロと妹は長野に疎開していました。

どちらに行こうかと迷い、結局、群馬の方を選びました。オヤジは、お前どっちに行こうか迷ったろう。迷ったときははいやだなあと迷った方へ行け、そうすれば苦労は少なくてすむ、と言いました。昭和二十一年、新宿の末広亭でつち奉公し始め、運よく桂小文治師匠の目にとまりました。桂小竹と名前を頂き、落語家への道が開けました。(以下略)

横山 操 展

10月1日(日) - 11月9日(日)
新潟県美術館(県民会館)
入場料 一般・学生700円
高校生以下400円
※月曜日、11月3日休館



九月二十一日・総合体育館
新潟大野ライオンズ
クラブ20周年記念講演